7日間彼氏

プロローグ

「はぁ……。ちょっと酔っぱらったかな」

彼氏のいない自分にとっては憂鬱なだけのクリスマス――それがやっと終わった週末、街には忘年会帰りと思われるサラリーマンやＯＬが溢れていた。

各々の店先には、はずし忘れたクリスマスの飾りと少し早い正月向けの飾りが、同居してぶらさがっている。それをぼんやりと視界の端でとらえながら、かすかにふらつく足で夜の繁華街を歩いていた。

藤崎美雪、二十歳。

今日は、卒業以来ずっと会えずにいた短大時代の友人たちとの久しぶりの飲み会だった。仕事にも少しずつ慣れ、恋も遊びもまっさかりの女たちの話題はつきない。女子トークは数時間におよび、とっくに日付は変わっていた。

「それにしても、驚いたなぁ～」

思わず呟き、足をとめてネオンを見上げた。

一番の遊び人で、まだまだ恋も仕事も謳歌するだろうと思っていた理子が結婚だなんて。

『この人を逃したら、次はないってピンときたんだ。彼、年も年だし早く結婚したいみたい』
そう言いながら頬を染めた理子は、今まで見たこともないくらい幸せそうな顔をしていた。その時が場の盛り上がりは最高潮だった。

――結婚はおろか、恋人さえできたことないなんて……皆に言える訳がない。
賑やかな居酒屋の一角にある個室には、急な呼びかけにもかかわらず、十人ほどのメンバーが集まっていた。いくつかのグループにわかれ、思い思いに料理やお酒を囲む。その中で一人、情けない気持ちでちびちびと飲んでいると、突然話の矛先が美雪に向いた。
「美雪は？　どう？　どーせオトコいないんでしょう。紹介しよっかぁ？」
中、高、短大とくされ縁が続いていた友人、瑠璃がいきなりそう声をかけてきた。
「えぇっ？　なんなのよ、いきなり……」
「アンタ中学高校と叶いもしない恋を追いかけてさ～。卒業式で玉砕してからは、すっかり臆病になっちゃって！　もしかしてまだ処女なんじゃないのぉ？」
たしかにその通りだ。もうすぐ二十一になろうというのに美雪にはいまだに彼氏がおらず、いわゆる男性経験はない。
とはいえ大勢の前で話題にされると思わずカチンときて、勢いで言ってしまった。
「うるさいなぁ！　今はちゃんと彼氏いますから」
タイミングが悪かった。たまたま場が静まっており、思いがけず美雪の発言が個室に響いた。

「え～、マジ⁉　短大時代は傍に男がいるってだけで固まってたよね？」
「そうそう、合コン連れてっても、むすーっとしててさ。それなりに可愛いのに」
しまった、と思ったがもう遅い。
「ねえねえ、どんな人ぉ～？　美雪の彼氏って！」
理子が、目をキラキラさせながら話題に入ってきた。
「い、いいじゃん別に……」
「見せたくないほど、イケてないとか？」
「そんなんじゃないけど……」
「じゃあいいじゃん‼　今度会わせてよ！」
いない人に、会わせることはできない。慌てて酔った頭をフル回転させ、なんとか理由を考える。
「つ、付き合いはじめたばっかりだし……ひ、人見知りする人だから」
「じゃあじゃあ、話だけでも聞かせて！　クリスマスはどうやって過ごしたの⁉」
「あー……えっと、クリスマスはお互い仕事で……」
「とかいって～。本当に彼氏できたの？　ちょっと強がった？」
さすが瑠璃、見すかされている。でも今さら、あとには引けない。
「わかったって！　今度連れてくるから‼」
その後、話題はふたたび結婚を決めた理子のことへと移りほっとしていたのだが、帰り際、

「じゃあ今度の飲み会は、美雪の彼氏をネタに盛り上がろうね～」
と、しっかり釘をさされてしまった。
（――どうしよう……）
余裕の笑顔を装って別れたものの、内心焦りまくっていた。すっかり暗い気持ちになりながら帰路につく。
今年のクリスマスイブだって、皆の嫌がる残業を引き受け、家に帰った時には日付が変わっていたくらいだ。いや、今年のクリスマスどころか……短大進学のために実家を出てから今までずっと、一人か女友達と過ごしている。彼氏はおろか、男友達だっていない。
はぁ……と思わずため息が出たところで、周囲の話し声が耳に入った。
「大輔～！　オイ！　大丈夫か～？」
人が行き交う交差点の脇で、道端に座り込んでいる男性が一人。酔い潰れてしまったのだろうか？かわいそうに思いながら、その光景を横目に通りすぎようとした時、男性の顔を見て驚きで足がとまった。
「しゅ、主任⁉　どうしたんですか⁉」
間違いない。電信柱を背に座り込んでいるのは、美雪の直属の上司である松沢大輔だった。
年はたしか三十くらいだったと思う。すらりと高い背は一八〇近くあるだろうか。黒髪にクールで整った顔立ちからやや冷たそうな印象を受けるが、ひそかにファンという女子社員も多い。

しかし仕事中はとにかく厳しいし怖いので、気安く声をかけたり傍に行けるような存在ではない。美雪も入社当時は彼の大人な雰囲気に憧れてはいたものの、同じ部署に配属になり毎日厳しく指導されるようになってからは、怖いというか緊張する存在でしかなくなっていた。
その上司が、普段のクールな姿からは考えられない状態で座り込んでいる。ありえない姿だった。
「ん？　君、大輔の知り合い？」
松沢の傍で介抱していた男性が、そう美雪に聞いた。
「はい、あの、会社が一緒で……松沢主任は私の上司なんですけど」
「そっかぁ、それは助かった。なんでかコイツ、今日はピッチが速くてさ。普段は酔っぱらうことなんてめったにないのに。そこの店を出て仲間と別れたあとに、座り込んじゃったんだよ」
歓迎会や忘年会で何度かお酒を飲む姿を見たことはあるが、静かに淡々と飲むイメージしかない。美雪にとっても、意外な姿だった。
「君、あの……」
傍らに座り込んで、マジマジと松沢の顔を覗き込んでいると、男性がふたたび声をかけてきた。
「あ、藤崎です。藤崎美雪と言います。松沢主任の直属の部下です」
「それは心強い。美雪ちゃん、大輔の家って知ってる？」
「家はさすがに知らないです……」
そう答えると、男性は明らかに困った表情を浮かべた。
「少し前に引っ越したみたいなんだ。俺も他のやつらも、誰もコイツの新しい住所知らなくてさ。

送っていってやろうにも、家がわかんないんだよ」
この年末の忙しい時期に引っ越しとは。会社ではプライベートな話をまったくしない松沢なので、そんなことは知るわけもなかった。きっと、同じ部署の誰も知らないに違いない。
「うーん、私はわからないですけど……。あ、引っ越しなら、会社に届けは出してますよね？　総務課の人に聞けばわかるかも……」
「ホント⁉　じゃあコイツ、引き取ってもらえないかなぁ。明日は土曜だし、俺が連れ帰ってやればいいんだけど……今うちの嫁さん妊娠中で、ちょっとデリケートな時期なんだよね」
ちらりと男性を見ると、左手には指輪が光っていた。それでは、酔っぱらった友達を連れて帰るわけにもいくまい。
「そうですか……。わかりました。なんとかします」
大丈夫だろうかと思いつつも、困っている様子を見かねて、ついそう言ってしまった。
「ありがとう！　あ、俺コイツとは高校時代からの友人で、平岡（ひらおか）って言います。どうしようもなくなったら連絡して。その時は俺の方でなんとかするからさ」
お互いの連絡先を交換すると、平岡と名乗ったその男性はこちらを気にしながらもイソイソと帰っていった。

「参ったなぁ……どうしよう」
平岡と別れてから、ゆうに三十分は過ぎている。浅はかだった。どう考えても。

一度会社に電話をしてみたものの、こんな夜中では守衛しかおらず、連絡先を調べる術（すべ）などなかった。
仕方なく総務課の同期に電話をかけようとも思ったが、もうすでに帰宅している彼女に、別の課の人間の住所などわかるはずがないだろう。かえって怪しまれて、あらぬ噂を流されてはたまらない。それが、皆の憧れである松沢主任の住所とくれば、下手すればストーカー扱いだ。そんなことになったら、入社一年目の新人は生きていけない。
「どうしよう……主任、しゅーにーん‼　起きて！　起きてくださーい‼」
さっきから何度も何度も呼びかけてはいるものの、聞こえているのかいないのか、松沢は目をつむって座り込んだままだった。
日付はもう変わっている。人通りもだんだんまばらになり、このままだとタクシーを拾うのさえ難しくなるかもしれない。なにより、アルコールをたくさん飲んだせいでさっきからトイレに行きたくて仕方なかった。
平岡に連絡をとることも考えたが、既婚者の彼にこんな夜遅くに女の自分が電話することもはばかられる。なんとかなるだろうと、気安く引き受けてしまったのは自分なのだ。
相変わらずうなだれたまま眠り続ける松沢の顔を見て、深く息を吐いた。
仕方ない。とりあえず自分の家に連れて帰ろう。幸いマンションはここから近く、タクシーに乗れば、十分もかからない。意を決してタクシーをとめ、運転手の力を借りて無理矢理、車内に松沢を押し込んだ。

「近くて申し訳ないんですけど……△△町までお願いします」
「はいよ。男前の彼氏、飲みすぎちゃったのかい？」
「はぁ……」
彼氏、という単語に落ち着かない気持ちになるが、訂正するのも面倒だった。自分にもたれかかっている松沢に目を向けると、仕事中は見たこともないような幼い顔ですーすーと寝息をたてている。
（彼氏……だったら、ジマンだよなぁ。こんな素敵な人）
「ん……」
ふいに低くてセクシーな声が耳元で聞こえ、そんな場合じゃないのに胸が高鳴る。
「だ、大丈夫ですか？」
慌てて声をかけてみたものの、返事はない。ほうっと息をつく。
お酒を飲んでるせいか、なんだか身体が熱い。
改めて松沢の顔を盗み見た。三十くらい、と曖昧に記憶していたけれど、こうやって近くで見てみるともう少し若い気がする。お酒の匂いとは違う、整髪料のような男っぽい香りが美雪の鼻をくすぐっていた。
こんなに近くに、男性の存在を感じたことはない。
ドキドキすると同時に、自分に寄りかかる温かい重みに心地よさも感じていた。
（彼氏って、こんな感じなのかな……）

途端に先ほど友人たちと交わしてしまった約束を思い出し、一気に憂鬱な気持ちに襲われる。
――忘れてた、彼氏を皆に会わせるって約束。こんなことをしている場合じゃない。自分のことをなんとかしなければ。
タクシーの窓越しに流れる景色を見ながら、またひとつため息をついた。

幸い、タクシーの運転手はとてもいい人で、松沢を玄関まで運ぶのを手伝ってくれた。松沢は時折呻くような声をあげるものの、起きているのか寝ているのかわからないような状態だ。
「こ、ここです……ありがとうございました……」
二人がかりで、といってもほとんど運んでくれたのはタクシーの運転手だったけれど、なんとか美雪の部屋の前までたどりつく。疲れた。
「本当に、どうもすみませんでした」
「いいよいいよ、あんまり飲ませすぎちゃだめだよ～」
玄関を上がったところに松沢を横たえ、運転手は帰っていった。
とりあえず急いでトイレを済ませ、あらためて玄関先で眠る松沢を見つめてしばし呆然としてしまう。
この家に、引っ越し業者以外の男の人が入ったことはない。そもそも彼氏どころか、男友達さえいないのだから。
そんなわが家に今、社内でも指折りのイケメン上司がなぜか横たわっている。今朝、家を出る時

には考えられなかったこの状況が、不思議でたまらない。
「しゅにーん！　主任！　まだ目、覚めませんかぁ～？」
ダメ元で呼びかけてみると、部屋の灯りにまぶしそうに目を細めながら松沢が反応した。
「ん……藤崎……？　んあー？」
「んあ～、じゃないですよ！　起きてください！　風邪ひきますよっ」
のっそりと起きあがりボーっと瞬きを繰り返す彼を見ていると、先ほどのドキドキが蘇る。
（やっぱり皆が騒ぐだけあって、かっこいいな……。仕事中は怖くてろくに顔も見れなかったけど、なんだかかわいいかも……）
「お水、飲みます？」
「おぉ……ここは、どこだ？」
「え？　あ……私の家です」
急にドギマギしてしまう。松沢は酔いつぶれていたから、ここに来た経緯などほとんどわからないのだ。変な誤解をされては困る。
「あっあの、主任が酔っぱらって道端に座り込んでて、平岡さんが家に連れていけないって困ってたから、私が仕方なくですね――！」
「平岡……？　なんで藤崎が平岡のこと知ってるんだよ」
「なんでって……」
なんと言っていいかわからず、言葉に詰まっているとゆらりと松沢が立ち上がった。

「しゅ、主任？　大丈夫ですか？　まだ座ってた方が……うぎゃっ」
女の子相手とは思えない力強さで顔をがっちりと挟まれた。
「ひゅ、ひゅにん……いひゃい……」
「なんで、平岡のこと知ってるんだよ」
酔っぱらいだけに力の加減がない。かなり痛い。
「ひょ、ひょっとまって！　い、いひゃい！　ひゅ、ひゅにん!!」
なんとか自分の頬から手を振りほどく。松沢はまだ納得のいかない顔をしてこちらを見ている。
「……なんで俺が藤崎の家にいるんだ？」
「だっ、だからですね、主任が酔っぱらって道端で座り込んでいて……」
「まあいいや。トイレ……トイレここか？」
美雪にかまわず、松沢はよろよろと立ち上がるとトイレに入っていった。バタン、とドアが閉まると同時に、どっと疲れが出る。
「もう……なんなの？　会社ではあんなにクールで知的なのに」
とは言え、目が覚めてよかった。事情を説明し終わったら、タクシーを呼んで家に帰ってもらおう。一刻も早くスーツを脱ぎすてて部屋着に着替えたかったけれど、同じ部屋に男性が、しかも上司がいるとなるとそうもいかない。
（まあひとまず……なんとかなりそうかな……）
キッチンで水を飲み干し、松沢がトイレから出るのを待った。

三分。
……五分。
……十分。
いくら待っても松沢は出てこない。もしかして、気分が悪くなったのだろうか。相当飲んでたみたいだし、ありえる。心配になり、コンコンとトイレのドアをノックした。
「主任？　大丈夫ですか？」
返事がない。しばらく考えた後、もう一度声をかける。
「あの……開けますよ？」
鍵がかかっていなかったので、躊躇(ためら)いながらもそっとドアを引いた。
「うぎゃっ!!」
ドアを開けると同時に、松沢の大きな身体がずるりと倒れてきた。
「……あ～！　もう！　寝てるし……」
そこには、ドアにもたれかかるようにしてすやすやと眠る松沢がいた。その姿を見下ろし、ため息をつく。
もう諦(あきら)めた。こんな状態の松沢とまともな話ができるとは思えないし、家にたどり着けるかどうかも怪しい。今日はこのまま自分の家に泊めて、明日起きたら事情を説明しよう。それが一番いい。というか、美雪にはそれしか案が浮かばなかった。
部屋の中央に布団をしき、松沢の大きな身体をずりずりと部屋までひきずった。ワンルームの小さな部屋とはいえ、それは大変な労力だった。
「はぁ……重いっ……なんで……こんなことに、なっちゃったのかな……」
なんとか布団の脇に横たえた松沢のスーツのボタンを一つ、二つとはずし、女性とは逆のシャツの開き方に初めて気付く。自分のあまりの男性経験のなさに、ほんの少し情けない気持ちになる。
なんとか上着は脱がせたものの、それ以上は体力的にも気持ち的にも無理だった。
（もういいや……このまま寝てもらおうっと）
ふたたび松沢をゴロゴロと転がし、布団の上へと移動させる。
自分もようやくスーツを脱ぎ、楽な部屋着に着替え――明日の朝、見られることを考えて、買ったばかりの可愛いめのスウェットにしておいた――電気を消してベッドにもぐる。
男の人と、仕方なくとはいえ同じ部屋で一緒に眠るなんて……
一瞬緊張はしたものの、静かで規則正しい松沢の寝息を聞いていたら、一人で意識していることが馬鹿らしくなってきた。
（……もう寝よう。今日は疲れた……）
横になると少し視界が回り、自分もアルコールを飲んでいたことを思い出した。目をつむると、あっと言う間に睡魔に襲われていた。
――なんだか身体があったかい……まだ暗いけど、今何時だろう？
枕元に置いたはずの携帯に手をのばそうとして、身体の自由がきかないことに気付く。

「!?」
驚きのあまり声も出ず、身体が硬直する。
（な、なんで!?）
改めて確認すると、どうやら自分は抱き締められるような形になっていた。目の前は白のTシャツ――というのか下着というのか――の胸元で、そっと目線を上にあげると瞼を閉じた男の人の顔がある。
寝る前の状況を考えると当たり前なのだけれど、それは松沢の顔だった。
（いつの間に!? スラックスも脱いでるし……って、し、下着だけ!?）
首だけを動かし布団の方を見てみると、無雑作にスラックスとYシャツが散らかっていた。
なんとか身体を動かしてみようとしたけれど、背中に回った手によって予想以上にがっちりとホールドされている。筋肉質な彼の身体は、ぴくりともしない。
（どうして……もしかして、彼女と間違えてるのかな……）
そう思うと、ちくっと胸が痛んだ。これだけ端整な顔で、背も高くて、会社では女子社員からの人気もある人。噂には疎く、そういった話を聞いたことはないけれど、彼女がいない方がおかしいというものだ。
（こんな状況、彼女に申し訳ないよね……）
ここから抜け出さなければ。なるべく静かに身体を起こそうとした。その時、
「ん……」

（やばい！ 起こしちゃった!?）
耳元に松沢の吐息がかかり、悪いことをしてる訳ではないのに、背中にヒヤリとした汗が滲む。彼女だと思って抱き締めていたのが、自分だと知ったら……きっと即座に離れるに違いない。それが淋しく感じ、慌ててその考えを否定した。
（――私、なに考えてるの!! ちゃんと間違えてますよ、って教えてあげないと）
「しゅ、主任……」
意を決して、そおっと声をかける。
「うん……なに……」
眠そうにぼんやりと目を開けた松沢が自分を見下ろしている。
「あの……誰だかわかってます？」
「ん……藤崎、だろ」
意外にもはっきりと自分の名前を言われて、どきっとする。
私だと……わかってる？
わかっててこの状況!?
顔が一気に熱くなった。
「あ、あの」
「まだ、眠い……」
掠れた声でそう言い、ぎゅうっと胸に押しつけられてしまった。いや、抱き締められたと言って

もいい。緊張で身体を硬くしていたら、背中に回った手が優しくさするように動くのがわかった。
温かくて大きな手が、なだめるかのように穏やかに動く。その手が気持ちよくて、身体からゆっくりと力が抜けていった。
（――あったかくて気持ちいいかも……）
美雪の身体から力が抜けたのを確認したのか、掌が背骨をなぞり、ゆっくりと上下に動く。動物でも撫でているかのような優しい動きに、美雪は置かれている状況も忘れて身を委ねた。心地よさに小さく息の音が漏れる。
するとその小さなため息のあと、松沢の手が腰のあたりをさわりと撫でた。偶然だろうか。そう思った次の瞬間には、その手はさらに下へと進もうとしていた。
気のせいではない。緩みかけた身体に、ふたたび力が入る。先ほどまでとは違う官能的な動きに、今度は声が漏れそうになった。美雪はそれをぐっと堪える。
（ヤバイヤバイヤバイ。どうなっちゃうの？　私）
憧れていた大人の男性、その腕の中にいることが信じられない。鼓動が速くなるのがわかり懸命に冷静になろうとしてみても、経験がないために、どうしていいかわからない。
不思議と不快な気持ちではなかった。だけど、こんな状況に流されるような行為は……、自分はいいけれど、松沢に申し訳ない。あとから、「なんであんなヤツに手を出したんだろう」と後悔するに決まっている。
「あ、あのっ」

勇気を出して呼びかけてはみたものの、返事はない。冷え性気味の自分よりも、ずっと高い体温。
それは、お酒のせいなのだろうか。それとも、男の人だから？
この温かくて大きな手は、なにをしようとしているのだろう。身体の芯が熱くなる。
「……ダメだ……やっぱ、ねむ……」
ふいに手がとまり、半ば寝言のように、頭の上からそんな声が聞こえてきた。
「えっ？」
美雪の身体を撫でまわしていた手は腰へと戻り、ぎゅうっと、引き寄せるように抱き締められた。思わず固まったままでいると、またスースーと規則正しい寝息が聞こえてきた。
どうやら……寝てしまったらしい。
（ちょ、ちょっと!!　どうなの!?　この体勢！　男の人と、上司と、この状況……）
美雪のドキドキなど知るよしもなく、松沢はどっぷりと眠りに落ちたようだった。まるで、抱きまくらになったような気持ちである。
結局、身動きがとれず悶々としたまま時はすぎ、ようやく美雪が眠りにつけたのは空がうっすら明るくなった頃だった。

一日目　期間限定彼氏？

「おはよう。藤崎」
「んぁ……おは、よう……っ!?」
一気に目が覚めた。
はっと目を開けて状況を確認すると、すぐ隣に横たわった松沢が、片肘(かたひじ)をついて掌(てのひら)で頭を支えた姿勢で自分を見下ろしてるのがわかった。
「っ……おはようございます……」
あれだけ酔っぱらった翌朝だというのに、なんだか爽やかな顔をしている。かすかに口元から漏れるアルコール臭がなければ、昨日のことは夢だったのかと思ってしまいそうだ。普段はきちんとセットされた髪が、寝起きで少し乱れてさらっと顔にかかっている。
そしてその顔は、少し怒っているように見えた。
――私、なにも悪いことしてないよね!?
起き上がることもできず、毛布を口元まで引き上げたまま、思わず自分に問いかける。まるで仕事で失敗した時のような緊張感に襲われる。
「あのっ、主任、これはですね、この状況はですね！」

「ああ、大丈夫。友達にメールで聞いて大体わかったから」
しれっと言われて拍子抜けしてしまった。
「友達……って、平岡さんですか？」
「……携帯、何度か鳴ってたけど、もしかして平岡か？」
「え？　携帯？」
慌てて枕元の携帯に手をのばすと、たしかにチカチカとランプが光っている。
メール二件。着信一件。
メールの一つは昨日の短大仲間からだったけれど、残りはたしかに平岡からだった。
「あー本当だ。平岡さんからメールと着信ですね」
「なんで平岡にアドレス教えたんだ？」
怒ったような視線を向けられ、妙に居心地が悪くなる。
「え、なんでって……困ったら連絡くれって言われて……」
「俺だって連絡先知らないのに、昨日初めて会った男に、簡単に教えるなよ」
そういう問題ではない。そう思うけれど、不機嫌そうな様子に、なんだか言えない。
「そもそも、なんで俺は藤崎の部屋にいるんだっけ？」
「な、なんでって……だって、主任が道端に座り込んでて……何回呼んでも起きてくれないし、どうしていいかわからなくて」
「連れて帰ってくれたんだ？」

今度はニヤニヤと、なんだか嬉しそうに人の顔を覗き込んでくる。からかわれているのだろうか。段々と腹が立ってきた。

「だって！　主任のお友達、困ってたんですよ？　家がわからないから送っていけない、しかも奥さんは妊娠中で家にも連れていけないって……。いい大人なのに、なにやってるんですか？」

ベッドの上だということも忘れ、思わずまくしたてた。

「へえ。いい大人か。藤崎からそんなこと言われるとは思わなかったなぁ」

松沢は妖しい笑顔でそう言うと、肘をついていない方の手を美雪の頭のうしろについた。

「な、なに……」

「いい大人なら、どういう状況かわかるよなぁ？」

どういう状況……そう言われて改めて自分の姿を見る。そうだ、いくら部屋着を着ているとはいえ、下着姿の男性と一つのベッドに入っているのだ。嫌でも身体は密着していて、今さらながら彼の体温が伝わってくる。

でも……だから？

社内にファンが多いイケメンで大人な松沢が、こんなガキの自分に変な気を起こすとは思えない。彼は信頼できる上司だ。そんなこと、するわけがない。

「あの……どういう状況と言われても、主任が私なんかを相手になにかするわけがありません。からかってるんですよね？」

なるべく仕事の時のように冷静にそう言うと、松沢は黙ってじっと美雪を見つめてきた。

「お前は……もう少し自分のことと、男のことをわかった方がいいと思うな」

どういう意味だろう。きょとんとしながら見つめ返すと、松沢は短いため息のようなものを吐いてから、むくりと身体を起こした。

「……俺の家、わからないから連れてきてくれたんだろ？　悪かったな。ありがとう」

「いえ……出すぎた真似をしてしまってすみません。総務の人に聞けば住所がわかるかと思ったんですが、時間も時間だったもので……。私の考えが浅はかでした。申し訳ありません」

思わず、仕事の時のような口のきき方をしてしまう。そう、だってこの人は上司なのだから。

ベッドから起きあがって、きちんと座りなおす。白いTシャツ姿の松沢を見るのが恥ずかしくてぎゅっと握った自分の手元を見つめていると、ふと視線を感じた。

顔を上げると、松沢が、じっとこちらを見つめていた。

「なんで俺を……ここまで連れて来てくれた？」

「え、だから、さっき……」

「そのまま、放っておけばよかったんじゃないか？」

「それだと……主任のお友達が、困っていたので……」

「それだけ？」

それだけと言われても……なんと言えばいいのだろう。言葉に詰まって黙っていると、松沢が近づく気配があった。

「……酔っぱらって困ってたら、お前は誰でも連れて帰るのか？」

「そ！　そんな訳……ないじゃないですか」
「じゃあ、どうして？」
「ど、どうしてって……しゅ、主任……」
気付くと、目の前に松沢の顔があった。
そんなに近くで、こんなに綺麗な顔を見せられ、なぜだか甘い声で問いかけられると……頭がくらくらする。
なんて言えばいいのかわからず、目を泳がせていると、
「……ぷっ」
松沢が吹きだした。
「藤崎、顔真っ赤。本当、男に免疫ないんだな～」
やっぱりからかわれていたのだ。
「ひ、ひどい!!」
「ひどくないよ。本当に理由が知りたかっただけだ」
そう言って、今度は美雪の頭をポンポンと優しくなでた。今まで、そんな風に男の人に触られたことはない。また顔が赤くなっているに違いない。
「お礼に朝食を奢る」という松沢の申し出を、素直に受けることにした。
本当は手早く家で朝食の用意ができればよかったのだが、しばらく買い物に行っていなかったため、冷蔵庫はからっぽだった。それに、近くなった松沢との距離が嬉しくて、正直もう少し一緒にいたかった。
松沢の家は、美雪の家から歩いていけるくらいの場所だった。「上がって待ってて」という彼の申し出を丁重に断りマンションの下で待っていると、ラフな格好の松沢が下りてきた。
「お待たせ」
（やば……かっこいい……）
スーツ姿も素敵だけれど、私服姿には違うかっこよさがあった。普段は自分よりずっとずっと大人に見える松沢が、ジーンズにラフなシャツとコートをはおった姿は、同世代にすら見える。なんだか、またぐんと身近に思えてしまった。
「なに？」
「い、いえ！　あの……若く見えますね」
言ってから、しまったと思った。
「悪かったな、普段はおっさんで。行くぞ」
ぶすっとした顔で、スタスタと先に歩いて行ってしまう。そんなことを言いたかった訳ではないのに。相変わらず、口下手な自分。ため息を一つついて、急いで松沢の後を追った。
まだ早い時間なので営業しているお店は少なく、手頃なファーストフードショップに入った。
「いいのか？　こんなとこで」
「え、全然構いません。主任は、朝からファーストフードで大丈夫ですか？」

「だから年寄り扱いするなよ……」
「あ、そういう意味じゃなくて！」
「わかってるって」
そう言って、レジの前へと促すように、松沢の手が美雪の背中に軽く触れた。自然なスキンシップはまるで恋人に対するもののようで、赤くなりつつ嬉しく思う自分がいる。
（きっと、素敵な彼女がいるんだろうな。うらやましいな……）
松沢が選んだ窓際の席に座り、もくもくとハンバーガーを口に運ぶ。なにか話そうと思っても、緊張して話題が思い浮かばない。突然のことすぎて意識する暇がなかった分、寝起きの方がずっとスムーズに話せた。
私って、つまらない女だ。せっかく憧れの上司と一緒にいるというのに、面白い話題ひとつ思いつけないなんて。はぁっと小さくため息をついた。
「なんだよ？　ため息なんかついて」
ポテトをつまみながら、松沢がムッとする。
「え？　あ……あの……なんでもないです」
慌ててフォローしなくてはと思っても、うまい言葉が浮かばない。
「俺と食事するの、そんなにイヤ？」
「そんな訳ないです！　あんまり、男の人と食事するのに慣れてなくて……緊張しちゃって」
「緊張？　お前、本当に男慣れしてないのな」

会社では苗字でしか呼ばない彼に、「お前」と呼ばれていることになんだかドキッとする。
「……この年になって恥ずかしいんですけど」
「一晩過ごした仲じゃないか」
驚いて顔をあげると、松沢がニヤニヤと笑いながら美雪の顔を見ている。
「ひ、一晩って！　その言い方はちょっとどうかと思いますけど」
そう言ってから、ハッと気付いた。
「そういえば……どうして主任、朝、私のベッドに入ってたんですか？　布団に寝かせたはずなのに」
「え？」
何気なく聞いたのに、意外にも松沢は口ごもった。
「どうしてって……」
「彼女と間違えたんですか？」
胸がちくっと痛んだけれど、なるべく平静を装い笑顔を浮かべながらそう聞く。
「……ていうか、そういうことは朝起きてすぐ聞け。今さらだ」
と言って口の中へポテトを放りこむ松沢の無愛想な口ぶりに、萎縮（いしゅく）してしまう。
「そ、そうですけど……なんでかなぁって思っちゃって」
「待て、アレ、お前の友達？」
「え？」
松沢が指さしている窓の外に目をやり、美雪は凍りついた。

「ちょ、ちょ、ちょっと待っててください!!」
「え、オイ!」
飲みかけ食べかけのトレイをそのままに、慌てて店の外に飛び出した。松沢が驚いて立ち上がろうとしているが、かまっていられない。よりによって……見られたくない人に見られてしまった。
「ちょっとぉ〜美雪〜! 誰なのよ! あれがもしかして昨日言ってた彼氏?」
「超カッコイイ! あんな素敵な人、どこで見つけたの!?」
窓の外にいたのは、昨日の飲み会のメンバーでもある短大仲間のさくらと結衣(ゆい)だった。
「あの! これはっ……」
なにか言い訳を……と思っても、この状況を上手く切り抜けられるだけの経験とボキャブラリーが自分にはない。
「こんな朝早くから一緒にいるってことは、もしかして……お泊まり!?」
「も〜お、言ってくれたらもっと早く帰してあ・げ・た・の・に♪」
両側からガシッと肩を組まれ、身動きがとれない。二人の目は、面白くてたまらないとでも言いたげに、キラキラと輝いている。
慌てる美雪をよそに店内に目を向け、彼女たちはとびっきりの笑顔で松沢に手を振ってみせた。
「ちょっ、なにやってんのよ!」
「いいじゃ〜ん! あんなにかっこよかったら見せたくない気持ちもわかるけどさ〜!」

なにも知らない松沢は、驚いた顔をしながらもニッコリと笑って軽く手をあげた。途端に二人から、「キャー!」と黄色い声が上がる。
(うわ、あれが噂のキラースマイル……)
社内ではいつも厳しい顔をして滅多に笑うことのない松沢だが、得意先で見せる笑顔には魅了される人も多いと聞く。
いや、感心してる場合ではない。
「ん!! なんか美雪、男の匂いがする!」
肩を組んでいた結衣が、軽く横にしばった美雪の髪の香りをくんくんと嗅(か)いだ。
「はぁっ!? お、男の匂いってなによ!」
慌てて振りほどこうとしたが、今度は反対側のさくらまでもがくんくんと鼻をならす。
「本当だ。なんていうの? ヘアワックスのようなコロンのような……」
「うぅっ、いいなぁ〜! 彼氏の匂いがついちゃうなんて! ラブラブなんだね〜」
「そうかぁ、これがあの大人な彼の香りなのね♪」
二人は、顔を見合わせてうっとりとうなずいている。昨日、松沢と一緒に寝ていたことで彼の香りが移ってしまったのだろうか。思いあたるふしがあるだけに、なにも言い返せなくなってしまった。
「ふ、二人はどうしてこんな時間に……?」
なんとか松沢から関心をそらそうと聞いてみた。
「飲み会の後も二人で女子トークしてたら、つい盛り上がっちゃったんだよね。ファミレスでオー

ルしてたら気付けばこんな時間だし。でもおかげでイイモン見れたー」
「あ～あ、瑠璃がいないのが残念！」
「そうだねー、美雪に彼氏ができたって話、一番疑ってたもん」
くされ縁の瑠璃がいないのは、幸いだった。彼女なら、ずかずかと店内に入って松沢を質問責めにしかねない。
「あ……あのさ、他の皆にはこのこと内緒に……」
しどろもどろにそう言うと、二人はニヤリと笑い、顔を見合わせた。
「ふっふっふ。あんなにカッコイイ彼氏じゃ見せたくない気持ちもわかるけどね～。それはちょーっと、ずるいんじゃない？」
「え！　い、いや、別にそういう訳じゃないんだけど」
「どのみちさぁ～、昨日飲み会で会わせるって言っちゃったんだし。なんとか彼氏説得しなよ。感じよさそうな人じゃん」
松沢は相変わらず涼しげな顔でコーヒーを飲んでいたが、こちらの視線に気付くとにっこりと微笑んだ。なんだか面白がっているようにすら見える。
「ほらほら♪　彼氏待たせちゃ悪いしぃ～。私たち行くね！」
「あ、瑠璃に写メを……」
「や！　やめて！　頼むからそれだけは!!」
携帯をかまえようとする二人の前に、慌てて割って入る。

「じゃあ～、近いうちにまた飲み会セッティングするから、その時は連れてくるんだよー」
キャハハッと笑いながら彼女たちは去っていった。
――まるで、嵐のようだった。

（どうしよう……）
ずーんと暗い気持ちになりながら、ヨロヨロと店内に戻った。
「どうしたんだ？　友達か？」
「はぁ……まぁ……」
どすんとイスに腰をおろし、思わず頭を抱えた。
「どうした？」
「あー……いや、なんでもないですから……ホント」
のどが渇いていたことを思い出し、一気にオレンジジュースをあおる。
「俺のこと、彼氏にでも間違えられたか？」
動揺して、オレンジジュースを吹き出しそうになった。
「げほっ……な、なんで……」
「この時間にこんな所で一緒にいたら、そう思われても仕方ないだろうな」
しれっと言い、コーヒーを飲む。まあたしかにそうだろう。
「別にいいだろ、彼氏と間違われるくらい。このシチュエーションじゃ、言い逃れできないし」

松沢はそう言うが、問題はそこではないのだ。
「なんだよ？　そんなに彼氏と思われたのが不服か？」
「は？　いっいえ、とんでもない！」
美雪は慌てて顔の前で手を振る。
「むしろ……主任に申し訳ないです。私の彼氏になんて間違えられちゃって、主任の方が困りますよね。すみません」
「別に俺は困らないけど」
憮然とした表情で松沢が言った。
「別に困らない」――その言葉はとても嬉しかったけど、今はそれどころではない。なんと答えてよいかわからず、美雪はただ無言でストローの袋をくしゃくしゃと丸めていた。
「……なんだよ？　お前。俺が彼氏に間違われると、そんなに困るのか？」
松沢は、怒ったような拗ねたような、複雑な顔をしていた。
「間違われると、困るヤツでもいるのか？」
「はぁ……えっ!?　あ、いやそんな人全然いないです！　私が困ってるのはそこじゃなくて……」
思わず口がすべった。
「そこじゃなくて？」
「い、いえ！　ええと……別に……」
「なんだよ。言えよ」

ちらりと松沢を見上げると、意外にも心配そうな顔をしている。
呆れられるかもしれない。女友達に、彼氏がいると見栄をはったなんて。
でも、はぐらかしたまま帰れる雰囲気でもない。そして、この場を切り抜けられるようなうまい言い訳も思い浮かばない。迷った挙句、仕方なくぽつぽつと昨日の飲み会での出来事を話し始めた。
「なんだ、そんなことか」
美雪の話を聞いた後に、そっけなく松沢が言った。
「……まあ女性におモテになる主任にしてみれば『そんなこと』程度なのかもしれないですけど」
思わず嫌味が出てしまった。こっちにとっては一大事なのに。ブチブチとストローを噛みながら、残りのジュースを吸い込もうとした時、思いがけない言葉が聞こえた。
「俺が彼氏として飲み会に行けばいいだろ？」
――――十秒は思考が停止していた気がする。
「はっ？　……え、ええ～～!!」
店の中だということも忘れて大声を出してしまった。周りの視線を感じて縮こまる。
「なんだ？　不満か？」
仕事中のような厳しい口調で言われ、口答えできない。
「ふっ不満だなんて、とんでもないです！　そうじゃなくて、そんな迷惑をかけるわけには……」
「俺だって昨日の夜、散々迷惑をかけたんだからお互い様だ。恩を売られたままというのは性に合

わないんだ」
はた、と気付く。そうか、昨日の恩返しと言われると納得がいく。自分の部下である美雪に酔っぱらって道路で眠りこけていたところを助けられ、さらに一晩世話になったなんて、男のプライドが許さないのかもしれない。
それに、女性に不自由なんて決してしないであろう松沢にとって、彼氏の「フリ」をすることなんて、なんてことないのだろう。単なるギブアンドテイクの関係だ。
「そ、そっか……昨日の借りを返すってことですね……」
言いながら、美雪はうんうん、と自分に言い聞かせるように頷(うなず)いた。これはいいアイデアかもしれない。どう考えたってすぐに自分に彼氏ができるとは思えないし、彼氏役を頼めるような男友達だっていない。一度皆に会わせて納得させ、その後「別れた」と言えばなんとかなるだろう。
「それじゃあ……あの、お願いしま……」
言いかけた瞬間、カウンターの上に置いていた美雪の携帯が鳴った。
『瑠璃』
開いた携帯の画面に映る文字に、思わず電源を切ってしまいたくなった。が、松沢の前でそんな不自然なこともできない。仕方なく一言断ってから携帯を耳にあてる。
「もしもし」
店の中ということもあり美雪は小さな声でそう言ったが、携帯の向こうからはひどく興奮した大きな声が聞こえてきた。

『ちょっと!! 今さくらからメールが来たんだけど、アンタ! 男といるんだって!?』
速い。女の情報網の伝達速度というのは、本当に速い……
「そ、そうだけど」
『昨日の話、本当だったの!? なんでもっと早く言わないのよ〜!』
嬉しいのか悔しいのか、怒っているのか喜んでいるのか、よくわからない。
「いや、あの、まだ、つ、付き合い始めたばっかりで……」
こんなことを言っていいのだろうか?
ちらっと松沢を見てみると、事情が呑み込めたのかニヤニヤしながら美雪を見つめている。余裕のある態度に、なんだか腹が立つ。
「……瑠璃? ごめん、あとで電話するから……」
『今、彼氏と一緒なんでしょ? ちょっと電話に出しなさいよ〜! 私まだ信じられないもん!』
「そんな、急に言われても……」
そう言いかけると、ひょいっと松沢が美雪の携帯を取り上げた。
「ちょっちょっと!! 主任!」
まあまあ、と手で軽く制すようなジェスチャーをしてから、
「はじめまして。ふじ……いや、美雪がお世話になっています。松沢と言います」
流暢(りゅうちょう)に話し出した。出た。低くて艶(つや)のある、キラーボイス。
『キャーー!! ホントに出たーーーー!!』

瑠璃の悲鳴にも似た絶叫が、携帯の向こうからかすかに聞こえてきた。
「あぁ……おはようございます。うん、聞いてます。あ、うん。……いや、会社が一緒で……」
瑠璃はなにを話しているのだろう？　隣に座って、携帯の裏側に耳をくっつけて会話を聞きたいぐらいだ。
「来週？　いや、大丈夫だと思う」
「もう切ってください！」と必死で、電話を切るようにジェスチャーを送る。
「あ、ごめんね。詳しくは美雪から。じゃあ」
松沢は余裕の表情で美雪に携帯を返す。
「ハイ、『美雪』」
「っ……なんですか、それ！」
赤くなりながらも、とりあえず携帯を耳にあてる。
「もしもし瑠璃？　もう切るよ。あとでまた……」
『ちょっとぉ～、本当だったんだね！　いやー信じられないわ』
「わかってもらえた？」
瑠璃の反応に少しほっとする。これで、わざわざ松沢に飲み会に出てもらわなくてもいいかもしれない。
「じゃあ、またね。そのうち連絡するから」
『うん！　じゃあ一週間後にね～♪』

……一週間後？　大量のハテナマークが頭に並んだが、携帯はすぐに切れてしまった。
「あの……どうもすみません……」
「いや、いいよ。若い子って感じで元気があっていいな」
松沢は相変わらずニヤニヤしている。なんか嫌な予感がする。
「瑠璃、なにか言ってました……？」
「昨日の飲み会のこと言ってたよ」
「それ以外に、一週間後とかなんとか……」
「一週間後、新年明けて早々に新年会もかねて飲み会開くってさ。お前と一緒に来てくれって」
それか!!　思わずこめかみを押さえる。
「……主任、なんて言ったんですか？」
「大丈夫だと思う、って。是非お友達も一緒に、って言ってたぞ」
「えぇっ！　瑠璃のヤツ、なんて図々しい……って、そうじゃなくて！」
松沢はたいして気にとめてない様子だったが、美雪はそれどころではなかった。
「あの……行くんですか？」
「行くって、さっき言わなかったっけ？」
「そ、そうですけど……一週間後なんて、そんな急な……」
飲み会に出てくれとお願いする気ではいたものの、こんなに早く話が進むとは。むしろ先ほど友人と遭遇（そうぐう）したり電話で話したりしたのだから、飲み会の話は流れてもいいだろうと思っていたのに。

「早い方がいいだろ」
相変わらず表情を変えず、松沢はコーヒーを飲む。
――そうか。
松沢にとっては、こんな面倒なことは早くすませてしまいたいのだろう。いつまでも部下に借りを作ったままにはしたくないだろうし、彼氏のフリをするという約束など、負担でしかないに違いない。
「そうですね。早い方がいいですね。ご迷惑をおかけしますが、協力してもらってもいいですか？」
少しだけ悲しくなった気持ちを誤魔化すように、冷静に頼んだ。
「……わかった。一週間後だな」
松沢が美雪の目をまっすぐに見つめた。
「七日間、お前の彼氏になってやるよ」
急に、鼓動が速くなる。
こんな素敵な人にまっすぐに見られながらそう言われて、ドキドキしないわけがない。
『七日間』という、期限さえなかったら……
そんな考えを振り払うように、美雪は勢いよく頭を下げた。
「よっよろしくお願いします！　主任！」

松沢が、ぷっと吹きだした。
「お前、仮にも彼氏に対して『主任』はないだろ、『主任』は」
「あ、でもなんて呼べば……」
「俺の名前、知らない？」
「し、知ってますけど……む、無理！　無理です！」
美雪は慌てて顔の前で手を振る。
「だ、大丈夫です！　飲み会の時にはちゃんと……」
「付け焼刃（やきば）じゃ無理だろ。お前、そんなに器用か？」
見透かされている。
「う……でも、いきなり名前で呼ぶなんて無理です……ホント」
「七日間でなんとかするしかないな。お前のあの友達の様子じゃ、つっこまれまくりだぞ」
電話で少し話しただけなのに、さすが松沢だ。
「せめて会社の外で『主任』はやめろ。苗字でもいいから」
「はい……松沢さん」
「ちゃんと呼べるようになれよ」
テーブルの向こうから手を伸ばして、くしゃくしゃと美雪の頭を撫でた。
彼氏って……こんな感じなの？　慣れないスキンシップに、顔がにやけそうになる。
（思いあがっちゃいけない……七日間だけだから、主任は借りを返すだけなんだから）

心の中で自分に言い聞かせる。
「そろそろ出るか」
「はい」
松沢の後をついて店を出ようとした時、美雪の携帯がふたたび鳴った。
「あ、平岡さんだ」
出ようとすると、むっとした顔で松沢が携帯を取り上げた。
「あっ！　ちょっと！」
美雪の制止も聞かず、松沢は通話ボタンを押して話し始める。
「もしもし？　俺」
「松沢さん！」
美雪の携帯に、勝手に出る理由がわからない。というか、この時間に松沢が電話に出て、どういう説明をするつもりなのだ。
慌てて携帯を奪い返そうとしたら、「うるさい」と言わんばかりに怒った顔をされる。
「ああ、昨日は悪かった。……うん、今一緒にいるよ」
（まあ元々主任のお友達なんだから、仕方ないのかもしれないけど――）
「別にいいだろ。俺たち、付き合うことになったから」
一瞬、耳を疑った。
「邪魔するなよ、じゃあな」

ポチッと通話ボタンを押して、ぽんっと携帯を掌にのせられた。
「!!!　なんでっ!?　そんな嘘をわざわざ……」
「……文句ある？」
「……いっいえ……失礼しました」
鋭い眼光で見下ろされては、なにも言えない。というか、文句を言える立場ではない。
なんだか色々と腑に落ちないが、ひとまず黙って携帯をポケットにしまった。
「ふぁ～～！　やっぱりちょっと眠いな」
店の外に出て太陽を浴びると、松沢は大きく伸びをした。
昨日は随分ぐっすりと眠っていたようですけど。喉まで出かかった言葉を、ぐっと呑み込む。
そういえば、どうして自分のベッドに入ってきたのか……結局聞きそびれてしまった。
「今日は帰るけど……お前、明日予定ある？」
「明日ですか？　いえ、とくには」
「デートするか」
「ふえっ？」
頭に優しく手をのせられて、思わず変な声が出てしまった。
「デ、デートですか？」
「お前、本当に男に免疫なさすぎ。このままだったら、友達にバレバレだぞ」
たしかにそうかもしれない。それでもなんだか信じられない気持ちで、松沢の顔を見上げた。

「連れて行ってくれるんですか？」
「七日間だけど、俺は彼氏なんだろ？」
美雪の顔を見下ろしながら、松沢がふっと笑った。会社では見ることのできないその優しい表情に、ドキッとする。
七日間だけ……たとえ期限つきだとしても、この状況を楽しんでいいだろうか？
出会いもなく男の人とも上手く話せない自分に、こんな素敵な彼氏ができる日なんて、きっと来ないから……。一生の思い出になるのは間違いない。
「あの……はい、お願いします」
「いいの？」
「はい」
意外にも嬉しそうな松沢の顔を見て、美雪の胸は痛いくらいに高鳴っていた。

二日目　初デート

日曜日、約束の時間より大分早く目が覚めてしまった。二度寝しようかとも思ったが、気持ちが高ぶって眠れる気がしない。
「う～～！」

立ち読みサンプルは
ここまで

意味もなく唸って枕に顔をうずめると、ほんのりと自分のものではない香りがする。
――これが、男の匂い？
かっと顔が熱くなる。ここに松沢と一緒に眠っていたなんて、嘘のようだ。
昨日、連絡先を交換して松沢と別れた後すぐに、平岡からふたたびメールが来た。
『付き合うって、本当？
もし、昨日なにかあったのなら謝るよ。
大輔を押しつけちゃってごめんね。
美雪ちゃんがいいならいいんだけど……
大輔のこと、よろしくね』
なんと返していいかわからず、返信できないままでいる。
（七日間……。今日は彼氏二日目か）
ぼんやりと考えながら、携帯を閉じた。デートどころか、男の人と二人で出かけたことすらない。松沢と別れてから、考えていたことと言えば今日の初デートのことばかりだった。なにを着ていけばいいのか、なにを持っていけばいいのか、エンドレスに悩みはつきない。
「あー、やっぱり昨日新しい服を買いに行けばよかった」
デートってくらいだから、やっぱりスカートを穿いた方がいいだろうか。持ち物は、携帯にお財布に化粧ポーチにハンカチ……他になにを持っていけばいいのだろう。
友達にメールでもして聞きたい気分だったけれど、状況が状況なだけにそういう訳にもいかない。